

茶の湯 文化学会 会報

第120号 / 2024年3月26日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

No.120

令和六年能登半島地震につきまして

矢野 環

二〇二四年元旦に発生いたしました「令和六年能登半島地震」によりお亡くなりになった方々に、哀悼の意を表します。

被災された皆様に心よりお見舞い申し上げるとともに、被災地の一日も早い復旧を願っております。

元旦に起こった能登半島地震は、京都においても明確な揺れ(震度二から三)が感じられた。その後の発表で、能登地方で16時06分Mj5.7、16時10分Mj7.6、16時18分Mj6.1、そしてMj4前後の規模の地震が元旦に四十回以上も発生したと知った(Mjは従来の気象庁マグニチュード)。

阪神淡路大震災がMj7.3、関東大震災がMj7.9とされるので、

その中間である。そして能登半島での罹災状況が明らかとなり、輪島市では広範囲の火災も発生したのであった。

石川県ではかつて金沢に前田家が入ってから、工芸が発展した。

その漆器産業は、木地の山中、塗りの輪島、蒔絵の金沢と伝統的に称されている。現在では単なる分業ではなく、特徴を活かして各地で最終製品が作られている。勿

論、茶道具も色々ある。今回の地震では、輪島の被害が著しかった。石川県立輪島漆芸技術研修所は、かなりの被害を受けた。前年十二月十四日に、令和六年度研修生入学選考試験結果を発表し、特別研修課程十三名、普通研修課程七名を発表したばかりであった。

卒業年度の研修生十七人については、県内外の大学等に作業場を借り、卒業作品を制作するが、彼は当面休講となっている。富山大学芸術文化学部(高岡市)は、研修所研修生の内9人の受け入れを決めた。金沢市内の大学も受け入れの予定である。

石川県輪島漆芸美術館は、元旦から「国際漆展・石川二〇二三輪島展(後期)」が行われてお

り、展覧会入館時間内に地震と
なった。また公式の罹災状況は公
表されていないようである。地震
の後に美術館から退避された館員
の方の報告では、建物に深刻な被
害はなく、入り口の外部に亀裂が
生じたということであり、実際
instagramにその様子がupされて
いる。

[https://www.instagram.com/
wajima_museum_of_urushi_art/](https://www.instagram.com/wajima_museum_of_urushi_art/)
また石川県は、茶道具のみなら
ず香道具に関するプロジェクトに
も参加された。例えば、次の通り。
―宇和島伊達家伝来品・十種香箱
復元制作プロジェクト報告展―
『工藝の再結晶―江戸期工人の軌
跡を辿った香道具復元制作』
(伊勢半本店 紅ミュージアム、
2011.10.1〜10.30)。

協力・公益財団法人宇和島伊達文
化保存会・石川県輪島漆芸美術館・
石川県を主とする工芸家諸氏・香
老舗 松栄堂。後援・石川県。

[https://www.isehanonten.co.jp/
cat-blog/blog_exhibition/
20110920blog/](https://www.isehanonten.co.jp/cat-blog/blog_exhibition/20110920blog/)

本プロジェクトには、平成十九
年能登半島地震(三月二十五日九
時四十一分)で罹災した輪島市在
住の方々も多く参加された。全体
の手法確認・再現は、石川県の漆
工・金工・陶磁・彩絵等の工芸
家諸氏の担当による。そして、こ
の報告展観覧料は、二〇一一年三
月十一日に発生した東日本大震災
(Mj8.4, Mw9.0)への文化財
修復の義援金として寄付された。
このプロジェクトは以前美術館の
ホームページでも紹介されていた
が、現在は確認できない。

宇和島伊達家は、伊達政宗の長
男秀宗による分家である。本家で
は天明四年に元木が燃えた名香
「柴舟」の、かつて分与した貴重
な一片が残されている。本家伊達
家の香木類の確かな一部とされる
のは、婚姻解消後に池田家に残さ

れたものが知られる程度である。

また、大倉集古館所蔵四季棚(志
野上棚)の復元にあたっては、輪
島の職人の方々によって採寸から
行われた。これは、島根の大谷香
代子氏が東京の香雅堂に依頼され
た個人的プロジェクトである。

日本列島は様々な災害に見舞わ
れながらも、復興してきた。二月
十四日十五時二十九分には、京都
府南部震源の震度四の地震があ
り、同日に能登地方ではMj3〜5
程度の地震が七回あった。

能登半島、また石川県における
様々な技法の継承と発展を願って
おります。

華道・茶道行動者推移

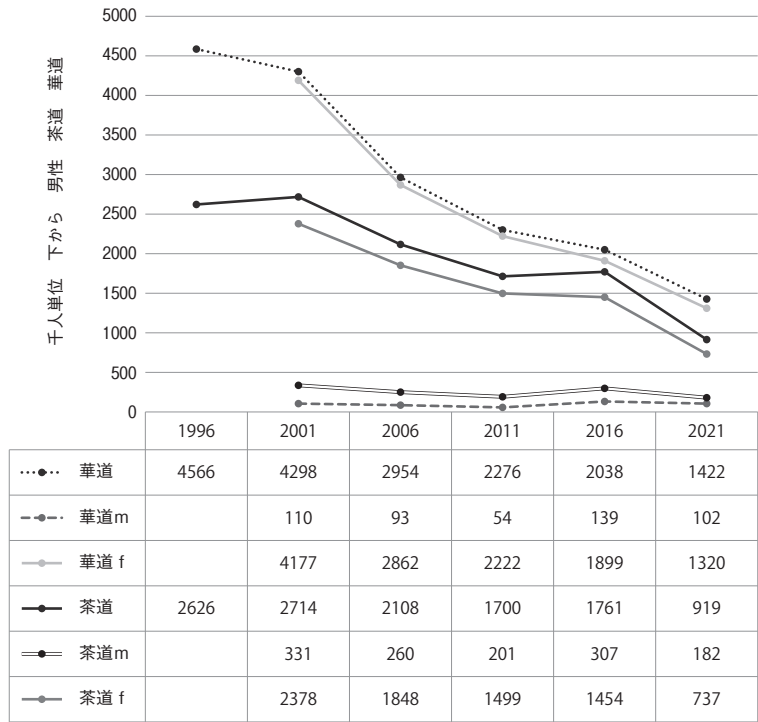
この機会に、以前提示したグラ
フの追補を示しておきたい。総務
省の行動者調査の二〇二一年分が
公表されている。それを含めて、

華道・茶道の二十五年間の推移(二
十年間は男女別も)を再確認した
い(図1)。それとともに、書道や
邦舞を含めた状況も見る(図2)。

華道・茶道行動者の推移を見れ
ば、この二十年間にほぼ1/3に
なったと確認される。元よりここ
の数値は調査に基づく実数から全
人口への推定をかけているので、
当然誤差が伴う。あくまでも、延
滞的なトレンドとして確認されれ
ばよいが、それでもグラフだけで
なく、数値を良く見る必要がある。
また女性(f)に比べて男性
(m)の割合は華道において特に
少ない。とはいえ、文化庁による
香道の調査においては(※)、様々
な設問に回答戴いたのは、二万人
の内三百九十一人であった。これ
は図1の数値表示でいえば19.5
に相当し、二〇一一年の特に少な
い華道男性54の半分にもならず、
1/3強である。

また、邦楽舞踊(演奏ではなく
踊り)と書道を含めて見れば、図

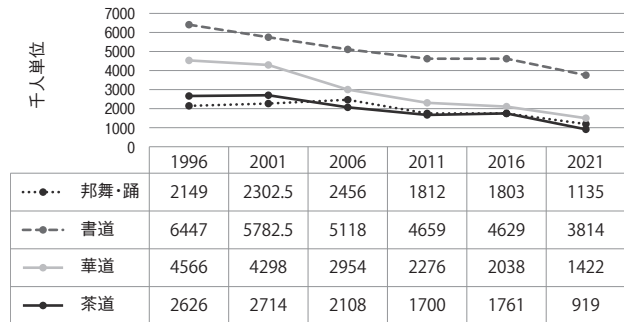
図1 華道・茶道 男女別行動者数推移



2の通りである。ただし、この二件の二〇一一年のデータが明確でないの、一九九六と二〇〇六からの平均値とした。邦楽舞踊は茶道とよく似ているが二十年間では

半分となった。書道は学校での教授もあるためか、0.6倍程度にとどまっている。華道・茶道では1/3といった劇的な変動ではない。

図2 邦舞踊・書道・華道・茶道 行動者数推移



茶の湯においても、愛好者と研究者の両方が増加するように様々なことを考えていく必要があるのだらう。二〇二六年度の総務省統計局調査がどうなるかを考えつつ。

(※) 茶道・華道や香道・煎茶道

等についての、文化庁生活文化調査研究報告書は左記にある。香道・煎茶道等の最終報告書は、四月迄に公表される。

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/seikatsubunka_chosa/index.html

例会

東京例会

(令和五年十一月十一日)

「古伊賀―破格のやきもの―」展について」

菅沢そわか

伊賀焼は伊賀国（現在の三重県伊賀市一帯）で焼かれたやきものである。特に桃山時代から江戸時代初期にかけて焼造した花生や水指などの茶陶は、釉薬を掛けずに焼き上げる焼締陶器を主体とし、「古伊賀」の呼称で高い評価を得ている。その特徴は、成形後に大胆な歪みや鋭い筥削りなどを加え

た個性豊かな造形と、焼成時の窯中で偶然に生み出された景色にある。

本発表は五島美術館で開催した「古伊賀―破格のやきもの―」展の紹介を主眼とし、あわせて古伊賀に関する用語の整理を行った。

これまで伊賀焼に焦点を当てた展覧会はほとんど開催されず、平成元年（一九八九）に三重県立美術館で開催された「古伊賀と桃山の陶芸」展以来、本展が約三十年ぶりの展示となった。発掘調査や茶会記などの研究の成果を踏まえ、伊賀焼の再検討を試みた。

古伊賀の年代は天正年間（一五七三～九二）から寛永年間（一六二四～四四）頃と説明される。茶会記における伊賀焼の初出は『天王寺屋会記』の宗及自会記であり、天正九年（一五八一）十月二十七日の会に「伊賀壺」が登場するが、花生や水指などの器種は登場せず、天正年間の様相は不詳である。

また、三か所の窯跡のうち、上野城内は窯体が未発見であるが、加藤唐九郎による出土遺物の実見では窯の存在を想定する。しかし、出土場所が天守付近であることや、窯の存在を示す窯壁などの出土品が散逸し確認できない点などから、窯跡ではない可能性が高いと指摘した。

「真精院（千猶鹿）にみる茶の湯と和歌」

石塚修

今回の発表は、茶の湯者における文学の受容の一例を、裏千家二代夫人千猶鹿（子）の和歌との関わりをとりあげてしめたものである。

まず、ここで共有すべき基礎知識は、現代のわが国では「文学」というともっぱら「散文」、とくに「小説」をイメージする傾向が強いけれども、古典においては、『古今和歌集』以来、詩歌、ことに和歌に関するリテラシーが重要

視されてきたという点である。そのため、茶の湯者においても和歌の知識は当然の基礎的教養とされ、茶器の銘なども和歌に由来するものが少なくない。また、近代における、西洋から移入された鑑賞者と創作者を分離して考える「芸術」観とは異なり、わが国では、創作者と享受者の相互の立場になれるかどうか、いわゆる芸術の基本であったことも確認しておきたい。

さらに和歌と近代短歌の違いについても、例歌を挙げて、近代短歌と和歌の用語のあり方が決定的な違いであることを解説した。正岡子規による短歌革新運動の一方で、明治二十一年（一八八八）高崎正風所長として宮内省に御歌所が設置されたことからわかるように、明治期には旧派とされる和歌の流行があったことを紹介した。そうしたなかで、茶道裏千家今日庵十一代玄々斎の息女で、二代又妙斎夫人となり、十三代圓

能斎の母となった千猶鹿（子）・真精院（嘉永三年（一八五〇）～大正五年（一九一六））をとりあげ、近代の茶の湯者と和歌との関係について、その和歌の師である神谷保朗（一八七三～一九五二）の結社「露の舎」との関連と、大正六年八月、真精院一周忌に『今日庵月報』百七号に掲載された『さめての聲』に所収された和歌を紹介しつつ解説した。

東海例会

（令和五年十一月二十五日）
「信楽焼とは―茶の湯道具を中心にして―」
大槻倫子

本発表は、信楽焼とはどのようなやきものなのかを明らかにするのが目的とした。日本六古窯の一つとして知られる信楽焼は、滋賀県甲賀市信楽町を中心とする地域でつくられている陶器である。常滑焼の技術を導入して、十三世紀中頃に始まるとされている。現在

の琵琶湖の前身である古代湖（古琵琶湖）由来の花崗岩質由来の土壌から採れる良質の粘土を使い、無釉焼締の壺・甕・鉢などの生活器を焼いた。十五世紀後半には、奈良、堺を中心とする侘び数奇の流行を背景に、備前焼と共に最も早く茶の湯の道具として用いられた和物陶器であると考えられている。しかし信楽の茶道具生産量は多くはなく、水指、花入を中心に日常器生産の傍らでおこなわれたものであった。十七世紀には施釉陶器を焼成するようになり、現在まで連綿と焼き継がれている。

発表では信楽焼の長い歴史の中から6つのエポック（①十三世紀～十五世紀の中世陶器、②十五世紀末の茶道具焼成、③十七世紀初腰白茶壺の焼成、④十八世紀中頃施釉陶器への展開、⑤二十世紀大物づくりの産地、⑥二十世紀後半作家たちによる焼締陶器への回帰）に注目したうえで、十五世紀後半から十七世紀前半の茶会記

等の記録、伝世品、生産地および消費地の出土資料から信楽焼の茶道具に注目し、代表的な信楽焼茶道具「鬼桶水指」「矢筈口水指」「筒花入」「蹲花入」の様相について述べた。

近畿例会

（令和五年十一月四日）

「藤田家と山本竹雲」

村田隆志

山本竹雲（一八二〇～一八八）は幕末から明治初期にかけて活躍した文人である。篆刻から入って、南画を能くし、詩にも書にも優れた、詩書画印の四絶の存在として知られた彼は、煎茶道具の鑑識にも長じた。過眼した多くの名品に篆意を取り込んだ独特の書風による箱書を加えており、「竹雲箱」は現在に至っても珍重されている。福井の文房流のように、竹雲の滞在と教導が後に創流の契機となった事例もあり、煎茶文化史にとって、極めて重要な存在と言え

る。

「風流界の霸王」（『近世雅人伝』）とすら称された竹雲は、現代の煎茶の美意識にも大きな影響を及ぼした存在である。

しかし、彼の事跡や芸術についてはほとんど研究蓄積がなく、竹雲がどのような人生を送り、どのような作品を制作していたのかについては断片的にしか知ることができない状況が続いていた。

発表者はこの現状を打開するべく、竹雲の人生について、年譜の作成に基づく考証を基盤とした伝記的研究を行ってきた。本発表においては、倉敷・味野での幼少年期、高松や大坂での修学の青年期、遊歴の中で濃厚な煎茶趣味を身に着けた壮年期、作品と見識が愛されて、藤田傳三郎をはじめとする愛好家との関係も深まっていた晩年期のそれぞれについて論じ、特に藤田家との関係を含めて考察した。

「藤田家と茶」

國井星太

藤田美術館のコレクションは実業家藤田傳三郎と長男・平太郎、次男徳次郎の二代三人による収集品から成る。特に茶の湯にかんするコレクションで知られるが、その一方で傳三郎は煎茶道具の収集にも励んだ。本稿では傳三郎の煎抹両方への興味と収集がどのようににかかわったのかを考えたい。

傳三郎は明治十四年には亭主として茶会を開いており（『八百善茶会記』）、この茶会では待合を煎茶席風に飾り付けていた。この時点で既に煎抹両方への興味を示し、道具の収集を始めていたことがわかる。明治三十五年には傳三郎は十八会の当番となった。十八会は京阪神の数寄者たちによる茶会で、煎抹両方の席を設けることが規定にあり、傳三郎は他を圧倒する量の道具を披露している。また傳三郎の道具収集の記録である『香雪斎藏品目録』には煎茶器

具編が存在することが明らかとなった。

傳三郎は官休庵の磯矢宋庸に茶を習い、明治十八年ないしは二十四年に武者小路千家第十一代一指斎より皆伝を受けている。その一方で傳三郎が生まれ育った萩は木戸孝允をはじめ、煎茶に傾倒した志士が多くおり、傳三郎は彼らと深く交流があった。既に萩在住のころから煎茶への興味を深めていたことは想定してよいだろう。

長男・平太郎は表千家第十二代惺斎から指導を受け、茶の湯の道具収集に励んだ。一方で次男・徳次郎は煎茶道具の収集をし、東山大茶会で席を持つなど、煎茶会を催していたことも知られる。傳三郎は煎抹両方へ興味を示し、道具を収集していたが、平太郎は抹茶、徳次郎は煎茶と分かれていたようにも思われる。

(令和五年十二月九日)

「キレ・切・名物裂」について

鈴木一弘

『松屋會記』『古今名物類聚』『銀座諸道具落札』の三冊から「名物裂」を繙いていきます。『松屋會記』に「キレ」の最初は一五四四年で「切」は一六〇八年に記載されています。「裂」は記載されていません。名物裂の多くは中国の裂ですから中国を視野に入れて考えなければなりません。中国福建省は後ろが山で前が海です。海流に乗ると船は長崎に着きます。長崎と福建の交易が始まって当然です。長崎の方に聞くと「福建の人は多いですよ」とのこと。福建語でキレーを漢字で書くと「綺麗」となります。大漢和辞典で「綺麗」を調べると「うるはしい。美しくはやか」とあり。「綺」は「あやぎぬ。綸子」とあります。中国人が染織品をキレーと発音したことで日本人が「キレ・切」と書いたのは中国語の発音によるものと

考えます。『古今名物類聚』一七八七年の十七十八巻の表紙に「名物切之部」となっています。今は「名物裂」ですが大漢和辞典では「裂」の意味は「きれ。きぬちのたちあまり」とあります。誰が「裂」を「きれ」と読ませ、「名物裂」としたかわかりませんが素晴らしい当て字をされたと思っています。『銀座諸道具落札』一七四年に沢山の落札の価格が記載されています。利休の茶杓が壹貫拾貳匁、長次郎茶碗は貳貫二百三拾匁の時、富田上下(二尺一寸横一尺四寸切二切ニテ)は廿二貫七百九拾匁九分といかに名物裂が高額であったかが分かります。

「茶室「黄梅庵」と松永耳庵の茶の湯」
木村栄美

『本研究は、近代数寄者の一人で、電力の鬼」と称された実業家・松永安左エ門(一八七五―一九七一、号・耳庵、以後耳庵と称す)が、

小田原・老樗荘に建立した茶室「黄梅庵」で開いた茶会の内容を明らかにすることを目的とする。

耳庵が命名した「黄梅庵」は奈良の今井町(現橿原市)にあった、今井宗久ゆかりの茶室と伝えられているが、その真偽のほどは定かではない。ただ、宗久ゆかりの茶室」といつから言われているのかは、明らかにしておく必要があるだろう。

耳庵は還暦から茶を嗜むと同時に、喫茶文化研究にも熱心に取り組み、谷川徹三、堀口捨巳、芳賀幸四郎等の研究者や、日本画家・前田青邨、数寄屋建築家・仰木魯堂の末弟・仰木政斎等文化人を支援するとともに深い親交があったことが窺える。

戦後も耳庵の茶の湯への意欲は衰えず、中でも「黄梅庵」は研究者、文化人、実業家、政治家等様々な人々を招いて茶会を開き、社交の場として用いられていた。茶会における茶道具も残されているも

のが多く、設えと併せて考察することは、耳庵の戦後における茶の湯の一端を垣間見ることができよう。

最後に、現在「黄梅庵」と共に堺市が所有している「伸庵」について触れておく。「伸庵」は仰木魯堂の設計で、かつては東都道具商・川部商会の川部太郎（一八九〇～一九三七、号・緑水）の所有であった。川部は昭和十年（一九三五）五月耳庵の号の由来ともなった「耳庵」の茶室披きの際、根津嘉一郎（号・青山、一八六〇～一九四〇）に同行している。近代数寄者のネットワークに道具商が関わっていることはこれまでも論考されているが、耳庵と川部、「黄梅庵」と「伸庵」、偶然とはいえ、浅からぬ縁があったことが窺えよう。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※日程等未定は、次号の会報またはホームページにてお知らせいたします。ご確認ください。

東京例会

令和六年五月二十五日（土）
（会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

吉野亜湖

「近代の万国博覧会における茶道」

岡本浩一

「茶道バイリンガル事典のMaking」

令和六年七月六日（土）

（会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

張茹涵

「未定」

岡宏憲

「岡田茂吉について（仮）」

令和六年九月二十八日（土）

（会場：未定・会場とZoomのハイブリッド開催）
午後二時～

岩田澄子

「光悦黒楽茶碗「七里」の銘について―『七里家代々直筆』（射和文庫蔵）を端緒として―」

依田 徹

「田安慶頼について―玄々齋と井伊直弼との関係から―」

令和六年十二月予定

東海例会

（会場：昭和美術館会議室）
午後二時～三時半

（開場午後一時半～）

令和六年四月二十七日（土）

田中恵美

「北宋文化の背景」

令和六年六月一日（土）

内田昌太郎

「瀬戸茶人に見る唐物受容とその認識 挿座に着目して」

令和六年九月二十八日（土）

午前十時～午後三時

茶会

令和六年十二月七日（土）

加藤祥平

「日本中近世における唐絵の受容」

近畿例会

令和六年四月二十七日（土）

午後二時～四時

（会場：同志社大学 今出川キャン

パス 良心館RY一〇五)

櫻井信也

「茶会記に見る鮪(鮓)」

矢野環

「石州、綱村、宗雅の茶会記―客、香、茶杓―」

令和六年(未定)

午後二時～四時

(会場：同志社大学 今出川キャンパス 教室未定)

廣田吉崇

「八戸藩における高橋道竹流の展開―創作される茶の湯流派として―」

高知例会

令和六年六月三十日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

「茶の湯文化学会二〇二四年度大会の研究発表をテーマとしたシンポジウム」

正午～午後四時

薄茶席 席主 二名

会費 五百円

(参会希望者は予めご連絡下さい)

令和六年九月十五日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶⅣ」

令和六年十二月八日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶⅤ」

正午～午後四時

軽食茶事 席主 三名

会費 三千円

(参会希望者は予めご連絡下さい)

令和七年二月九日(日)

(会場：高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表

「地域の茶人に学ぶⅥ」

高知支部2025年度事業計画

お知らせ

令和六年度総会・大会の

ご案内

令和六年度総会・大会を左記の

日程で計画中です。詳細は令和六

年四月に郵送・ホームページにて

ご案内いたします。

令和六年六月八日(土)

見学会：大徳寺芳春院

懇親会：東華菜館 本店

令和六年六月九日(日)

総会・大会

同志社大学 今出川キャンパス

シンポジウムテーマ…

「近世における武家相応の茶の成

立と展開」

新刊紹介

『茶の湯の不思議なチカラ』 侘

数寄』から「わびとさび」へ』

谷晃著 淡交社

定価一、八七〇円(税込)

※二〇二四年度年会費を払込みく

ださいますようよろしくお願い

いたします。

